

		講義概要 (講師名・所属)	
1日目 4月13日 (土)	1限	日本語文法理論 モダリティ形式をめぐる諸課題 (川村大・東京外国語大学大学院教授)	
		後期に開講する講義「日本語文法理論Ⅲ」の問題意識について、助動詞「う・よう」を糸口にいっつか御紹介したいと思います。例えば、「う・よう」は(少なくとも)「意志」「推量」という2つの意味を表すと言いますが、この2つの意味はどのような関係にあるのでしょうか。話し手がこれから自分である行為を実現することを欲するという(意志)と、物事がこれから起きると予測すること(推量)とは、同じ人間の心の営みだとはいえ相当に異なります。また、「う・よう」はしばしば話し手の発話時の態度を表す形式だ、と言われることがあります。「意志」や「推量」を表す場合は、そういう理解で間違いありません。しかし、やや固定化した言い方ですが、「雨が降ろうが槍が降ろうが」「たとえ何があろうとも」「川村先生ともあろう人が」などの場合の「う・よう」は「話し手の発話時の態度を表す形式」だとは言えません。このほかの話題も取り上げながら、よく知られているかのような「う・よう」も、じつは考えるべきことがいろいろあることをお示しします。	
		言語学入門 「繰り返し」から入門する言語学 (長屋尚典・東京大学准教授)	
		人間の言語には語の全体や一部を繰り返す現象がよく観察されます。たとえば、日本語でも「村々」「神々」のように繰り返すことで数の多さを表したり、「ドンドン」「ワンワン」などのようにオノマトペを形成するために繰り返しが使われることもあります。フィリピンで話されるタガログ語では kainin「食べる」から ka~kainin「食べるだろう」のように語の一部を繰り返すことで未来形が形成されます。このように語の一部や全体を繰り返して新しい語をつくる手段のことを重複(ちょうぶく)と呼びます。単に繰り返すだけの原始的な方法のように感じられるかもしれませんが、実は、ヨーロッパの諸言語を除く世界中の言語で頻繁に使われており、人間言語にとって極めて重要な語形成方法です。 本講義ではこの重複についてあれこれ考えながら、言語学と呼ばれる学問分野の「はじめの一步」をみなさんと一緒に踏み出したいと考えています。	
	2限	認知言語学 認知言語学の古典を読む (野村益弘・北海道大学教授)	
		Hua語やKhmer語の記述文法で知られるJohn Haimanは、類像性(iconicity)の研究によって認知言語学でもよく知られた存在です。1980年に発表された“Dictionaries and encyclopedias”(Lingua 50: 329-357)は、「辞書(言語知識)と百科事典(世界知識)の峻別は可能か?」という問題について、これまで提案されてきた諸々の分別基準(言語/文化、主観/客観、本質/偶有、意味論/語用論、分析/総合など)に検討を加えた上で、“Dictionaries are encyclopedias.”と明確に主張した古典的論文です。Langackerも自身の認知文法の意味観と相通じるものとして早くから言及してきたこの論文を、本講義では「辞書と百科事典の区別がそもそもなぜ問題となるのか?」から始めて精読していき、(時間が許せば、その後のWilliam Frawleyによる反論、Haimanによる再反論や、記号接地問題など最近の展開も含めて)意味の拡がりについて考えてみたいと思います。	
		社会言語学 社会言語学入門 (嶋田珠巳・明海大学教授)	
			私たちの日常のコミュニケーションから、ことばと権力の関わる諸問題まで、社会言語学は多くの話題にあふれています。この講座では、社会言語学がどのような分野で、どのような研究がなされていて、どのような探究が可能なのかをお話しします。「社会言語学」の響きになにかしら惹かれる方には〈社会〉と〈言語〉の掛け合わせゆえに見えてくる言語の性質を、「社会言語学」と聞いて言語学の教科書の最後の方を思い浮かべる方には「社会関与性から始める言語学」の可能性を、卒業研究でなにをどう進めたらいいのか模索中の方にはことばの研究着手へのヒントを、はたまた春だから何かを始めたいと思っている方には普段の言語使用を見つめる視点を、なにかしらお届けできるような講義にしたいと考えています。異なる言語や方言の出会いがもたらす現象に興味がある方、「言語とアイデンティティ」と聞いて何かありそうだと思う方、お声掛けしただしたらキリがないのですが、「ことばと社会」への探究の扉はいつも開かれています。
	3限	実験音声学 計量音声学への招待 身近な題材から学ぶ音声学入門 (川原繁人・慶應義塾大学教授)	
		本講義では、音声学的な視点と計量学的な分析スキルを身につけると、日常のさまざまな現象に対する新たな視点を得られることを論じます。例えば、短歌で	

		<p>使われている頭韻の技術やラップで使われる脚韻の技術などは音声学的観点から考えると、非常に理にかなったものです。また、基礎的な音声学的な知見がプロの歌手やアナウンサー、声優たちにとってとても有用であるという報告もあります。本講義の前半では、これらを私が実際に体験した事例をケーススタディとして紹介していきます。また、音声学的な考え方をを用いると、プリキュアやポケモンなどの名前に隠れた法則性についても分析が可能です。例えば、「可愛いキャラクター」に頻出する音や「強いキャラクター」に頻出する音などが統計的に検知できるのです。そして、その背後には音声的なメカニズムが潜んでいることも近年の研究でわかってきました。一方でこれらの分析をおこなうためにはしっかりと「学問的なお作法」も必要です。よって、どのような題材を分析するにせよ必要になる音声学における科学的な研究の方法論についても言及します。</p>
		<p>意味論 意味論への招待 (酒井智宏・早稲田大学教授)</p>
		<p>意味論は理論言語学の中で一番とっつきやすい分野に見えて実は一番とっつきにくい分野です。理由はいくつかありますが、一つだけあげると、意味がどこにあるかわからないことです。音と単語と統語構造は、簡単にとは言えませんが、がんばればある程度観察することができそうですし(音韻論・音声学、形態論、統語論)、言語の使用は確実に観察することができます(語用論)。これに対して、「水」や「私」という語の「発音」でも「構造」でも「使用」でもなく、ただ「意味」を観察せよ、と言われても、どこを観察すればよいのか見当もつかないでしょう。</p> <p>このようなときには、「意味」を探すことをいったんあきらめて、「意味を理解するとはどういうことか」を問うという方法があります。語義の理解は言語使用者の頭の中で完結するものなのでしょうか。それとも言語使用者が置かれた環境の影響を受けるのでしょうか。春期講座では、「意味の理解」という観点から、「意味はどこにあるか」という問題の一端に迫りたいと思います。</p>
		<p>言語哲学 (峯島宏次・慶應義塾大学准教授)</p>
		<p>言語哲学は、哲学の中でも長い伝統をもち、特にフレーゲ以降の現代哲学では重要な位置を占めてきました。例えば、「人間の思考とはどのようなものか」とか「世界には何があるのか」とかいった大きな問いは、人間の言語を調べることではじめて接近できると考える哲学者がいます。このような哲学へのアプローチは現在、かならずしも多くの支持を集めているわけではありませんが、現在でも言語が哲学者の主要な関心事の一つであることには変わりありません。同時に言語哲学は、言語学の中でも特に意味論・語用論の分野と深く関係しています。言語哲学の概念や方法は、意味と指示、量化や様相といった「意味論」の周辺の話から、話者の意図、コミュニケーションや言語行為といった「語用論」の周辺の話まで、多様な領域で使われています。この講義では、理論言語学講座(後期)「言語哲学」への導入として、「名前(固有名)の意味とは何か」という問いをもとにして、言語哲学の展開の中でいくつかの代表的な考え方について理解を深めたいと思います。</p>
4限		<p>生成文法 I (入門) (平岩健・明治学院大学教授)</p>
		<p>私たちが普段使っている自然言語では意識的に認知できるのは意味形式と音声形式(手話言語の場合はジェスチャー)の二つです。どの言語でも辞書には音声と意味がペアで表記される形式になっているのはまさにそのためです。</p> <p>では自然言語のシステムは意味と音声だけで構成されているのでしょうか? 生成文法理論の重要な知見の一つは自然言語の文は単語同士の結合が文法原理に基づき回帰的に適用されることで生成されていることを発見し、文においては意味と音声/ジェスチャーが直接的にペアリングされているのではなく、二つは目や耳では認知できない「統語構造」を介してペアリングしていることを明らかにしたことです。</p> <p>この春季講座ではまず生成文法理論の中心的な考え方を簡潔に可能な限りわかりやすく概観したのち、構造が存在する証拠として構造的多義性(一つの文が全くことなる二つ以上の意味を表す現象)と日英語の縮約疑問構文(英語の'Guess who.'等)を取り上げながら自然言語における統語構造の重要性を具体的に紹介したいと思います。</p>
2日目 4月14日 (日)	1限	<p>史的言語学 世界英語と英語史 (堀田隆一・慶應義塾大学教授)</p> <p>通常私たちが学んでいる「標準英語」は英米の英語を基盤としていますが、現在世界中で用いられている英語はインド英語、ナイジェリア英語、ジャマイカ英語などと実に多様です。近年、これらは「世界英語」(英語では複数形の "World Englishes") と呼ばれることも多くなってきました。本講座では、この「世界英</p>

	<p>語」現象とは何なのかを導入するとともに、なぜ、どのようにこの現象が生じているのかについて、主に英語の歴史の観点から議論します。</p> <p>音声学 (中川裕・東京外国語教授)</p> <p>春期講座では、2024年度前期に開講する音声学講座「調音音声学」で取り扱う内容に触れながら、調音点 (place of articulation) に焦点をあてて、音声学の基礎知識と技能を身につけるための拠所を講義します。伝統的に調音音声学の授業では、主観的な観察 (内省) の訓練をしますが、それを補うための客観的な器械音声学的・実験(室)音声学的な観察も利用します。今回の講座では、調音点の内省の要領の実践的解説のほか、調音点を観察するための方法として、パラトグラフィ・唇の動画撮影・MRI撮像資料を取り上げ、それらの利用法のエッセンスを具体的な資料を見せながらお話しします。また、音響音声学的な資料 (たとえばスペクトログラム) に読み取ることのできる調音点の違いについても触れます。さらに、時間があれば、国際音声記号(IPA)の調音点用語と音韻論で標準的に使われる調音点素性の対応に触れながら、調音点を理解するための階層的な構造 (上位分類・下位分類) を概説します。</p>
2限	<p>認知言語学 母語としての日本語を考える (池上嘉彦・東京大学名誉教授)</p> <p>『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』(大修館書店、1981年)と題した書物の中で、(母語としての) &lt;日本語&gt; という言語についてどのようなことを述べたかったのか—その点について、具体的な事例を含めて以前まとめたハンドアウト (「参照文献」表も含めてA4版で15頁を配布) を参照していただきつつ、時間の許す限りでのお話をさせていただきたいと思ひます。</p> <p>(このハンドアウトは「表現構造の比較—&lt;スル&gt; 的な言語と&lt;ナル&gt; 的な言語」(国広哲弥編『日英語比較講座・第4巻 発想と表現』(大修館書店、1982年)の第2章 (pp. 67-110) として収録の論考) の要約で、認知言語学でいう&lt;事態把握&gt; (construal) —つまり、ある場面において、何 (what) を表現し、何を表現しないでおくのか、そして表現するならば、それをどのように (how) 表現するのか、という、発話に際して話者が主体的に取り組む営み—に関わる言語的側面の検証が中心ですが、関係する文化的側面についても (上記、池上(1981)) における叙述と同様に) 必要に応じて言及します。)</p> <p>認知語用論 (松井智子・中央大学教授)</p> <p>語用論は、会話を中心とした日常的なコミュニケーションのメカニズムを研究する学問分野です。会話で使われる言葉の意味を解釈するとき、また会話の中で言葉になっていないメッセージを汲み取るとき、どちらも相手の「意図」や「態度」といった、目には見えない心の状態を推し量ることが鍵になります。この講義では、コミュニケーションにおいて、相手の意図や態度を推測する能力を「語用能力」としてとらえます。そしてその働きや発達、障害について検討し、後期の理論言語学講座で取り上げる内容の導入とします。</p> <p>言外の意味の理解をも可能にする語用能力を支えるのは、相手の心のうちを読み取る推論能力です。これは、哲学や心理学で「心の理論」と呼ばれる能力と近いと考えられています。本講義では、この心の理論の発達途上である子どもや、心の理論に障害があるとされる自閉スペクトラム症児・者のコミュニケーションの困難さに触れながら、語用能力とは何か、考えていきたいと思ひます。</p>
3限	<p>生成文法Ⅱ 移動現象と残部移動 (高野祐二・金城学院大学教授)</p> <p>人間言語にはさまざまな移動現象が存在します。生成文法の統語論研究において、そのような移動現象の研究は常に中心的課題となってきました。典型的な移動現象として古くから取り上げられてきたものとして、英語の疑問文における疑問詞の移動や受動態における名詞句の移動があります。こういった移動現象の分析は、理論の変遷とともに変わります。生成文法の初期段階では移動現象ごとに変形規則を立てていましたが、統語理論の発展とともに移動現象は個別の変形規則ではなく、Move-<math>\alpha</math> という一般的な移動操作で捉えられるようになりました。そして、最近のミニマリスト・プログラムでは、移動特有の操作が存在するのではなく、併合という統語部門の基本操作が統語構造の構築から移動現象の分析までをカバーするという考えになっています。本講義では、生成文法における移動現象の研究の具体例として「残部移動 (remnant movement)」と呼ばれる分析を取り上げ、この分析で説明できることとその帰結、および新たな課題について考えます。</p> <p>日本語文法理論</p>

	<p style="text-align: right;">(定延利之・京都大学教授)</p> <p>伝統的な言語学では、言語は「脱-現場的なもの」と考えられてきました。たとえば、いま、ここにあるリンゴだけでなく、以前に見かけたリンゴ、今度買うかもしれないリンゴ、白雪姫が食べたリンゴなど、すべて「リンゴ」と言うことができます。「リンゴ」ということばは確かに、特定の現場に限られない「脱-現場的なもの」に見えます。しかしそれでも言語の基本は、いま、ここに現実にある発話の現場、そしてコミュニケーションの現場なのだ、というのがこの講義の核となる考えです。こう考えれば、日本語の文法のさまざまな謎を解明する道が見えてきます。たとえば、車が動かない原因を発見すれば、「あ、サイドブレーキかかっている!」と、車内の誰でも言えます。しかし「あ、サイドブレーキかかっていた!」は、運転座席の者にほぼ限られます。なぜでしょう? またたとえば、「あの人の話、長くない?」と訊かれて、「だ」と答えるのは不自然です。しかし「だな」「だよな」は自然です。なぜでしょう? アンケート調査の結果を踏まえて、現場に根ざした文法システムについてお話ししたいと思います。</p>
4 限	<p>形態論・語形成論 形態論：語形成と意味</p> <p style="text-align: right;">(由本陽子・大阪大学名誉教授)</p>
	<p>私たちは、文の意味を解釈する際、文を構成する語に関する知識と文を組み立てる文法とを使っています。語についてもすべてが学習され記憶されているわけではなく、複数の要素によって形成されている語については、知らない語であっても、その語を構成する語や形態素についての情報と語形成の規則や原理に関する知識とによって、適切な解釈をすることができているのです。複合語の例で説明すると、たとえば、名詞と自動詞の連用形が複合した「ガス漏れ」と「ウサギ跳び」とでは、その意味関係は異なり、名詞が動詞の主語として解釈されるのは前者だけですが、この違いは、複合語形成を制約する原理と各動詞の性質（非対格動詞か非能格動詞か）によって説明することができます。また、名詞を二つ結合した複合語「野菜スープ」と「ワイングラス」については、まず右側の名詞についての情報（スープは料理、グラスは食器）をもとに、左側の名詞が、前者では「料理の材料」、後者では「食器の用途」を表すという解釈が導かれているのです。本講座では、このような複雑語の解釈には、どのような規則や原理のもと、どのような語についての情報が用いられているのか探っていきます。</p>
	<p>言語心理学 はじめての言語獲得研究</p> <p style="text-align: right;">(杉崎鉦司・関西学院大学教授)</p>
	<p>ヒトのこのころのさまざまな領域について、その発達には先天的要因と後天的要因の両方が関与しており、発達の過程はその相互作用によって説明されるべきものであることが明らかにされています。生成文法と呼ばれる言語理論は、母語知識の獲得はその典型であると考えます。この理論によると、母語知識の獲得は、遺伝によりヒトに生得的に与えられている内的な仕組み（普遍文法）と生後取り込まれる言語の情報（言語経験）との相互作用によって達成され、この仕組みが発達の筋道と到達点を制約しているのです。この仮説が正しければ、この内的な仕組みが関与している母語知識の本質的な部分に関しては、幼児は観察しうる最初期から成人と同質の知識を持つことが期待されます。この講義では、英語の why および日本語の「なぜ」に関する統語的制約を取りあげ、私自身が実施した自然発話分析および心理実験に基づいてこの予測の妥当性を検討したいと思います。それを通して、生成文法理論に基づく母語獲得研究のおもしろさをできるかぎりわかりやすく伝えたいと考えています。</p>